

プログラム・ノート

林田直樹

ショパン：ピアノ三重奏曲 ト短調 作品8 より 第1楽章

ナポレオン戦争後のウィーン体制下、プロイセンが支配していたポズナン公国（ポーランド西部）の総督アントニ・ヘンリク・ラジヴィウ公（1775～1833）は、芸術家の有力なパトロンであり、優れたチェリスト、作曲家でもあった。ラジヴィウ公は、前途有望なポーランド人の青年作曲家フレデリック・ショパン（1810～49）の才能を認めて温かくもてなした。ショパンがそれに対する感謝の意味をこめ、1829年（19歳）のときに献呈したのがこの作品である。第1楽章は決然として燃えるような冒頭主題が印象的で、悩ましい旋律と古典的な構成は、この後の二つのピアノ協奏曲に通じる。演奏頻度は多くないが、若きショパンの個性の確立された見事な作品である。

フォーレ：『ロマンス』変ロ長調 作品28

ガブリエル・フォーレ（1845～1924）は、歌曲、室内楽、ピアノ曲の分野で特に多く名作を残したが、その出発点はグレゴリオ聖歌、パレストリーナ、バッハなどの古い教会音楽にあった。マドレーヌ教会のオルガニスト、パリ音楽院院長としての活動も重要である。内省的でつましく、しかも官能的な音楽を書いたフォーレは、若い頃に入入りしていた名歌手ポーリース・ヴィアルド（1821～1910）のパリのサロンでの、ジョルジュ・サンド、フローベール、ツルゲーネフなどの芸術家との交流からも影響を受けている。この曲は1877年（32歳）に書かれたヴァイオリンとピアノのための舟歌風の小品。情熱的な中間部をはさんで、穏やかに揺らぐような主部へと再び回帰するところは特に魅力的だ。

グラナドス：『スペイン舞曲集』より 第5曲「アンダルーサ」

カタルーニャ出身のエンリケ・グラナドス（1867～1916）は、7歳年上のイサーク・アルベニス（1860～1909）、9歳年下のマヌエル・デ・ファリャ（1876～1946）と並んで、近代スペイン音楽を代表する作曲家の一人。シューマン、リスト、ショパンらの影響を受け、ピアニストとして最初成功したグラナドスは、ロマンティックな音楽の枠内にとどまりつつ、スペインらしい“粋”の感覚にあふれた、色彩的な作品を多く残した。20代半ばに発表した『スペイン舞曲集』は全12曲からなる出世作。最も有名な「アンダルーサ」は、アンダルシア地方の風俗を感じさせる曲。冒頭のエキゾチックなリズムの弾き方は、ピアニストによって千差万別である。

シューマン(リスト 編曲):「献呈」 S. 566

ロベルト・シューマン(1810～56)が、1840年(30歳)の結婚式前日にクララ(1819～96)に贈った歌曲集『ミルテの花』の第1曲を、その8年後にフランツ・リスト(1811～86)がピアノ独奏用に編曲したもの。原作におけるシューマンの音楽は、リュッケルトの詩に「Du(きみ)」と親しく呼びかける二人称が多用されていることにも表れているように、愛する女性へのほとぼしるような思いがあふれる、感激的な瞬間を捉えた歌である。それに対してリストのピアノ編曲版は、堂々としたスケール、華麗なピアノリズム、ドラマティックな構成へと拡大されている。しばしばアンコール・ピースとして演奏されるが、ドイツ・ロマン派の中心にあった二人の作曲家の個性が融合した、短いながらも興味深い作品でもある。

サン=サーンス:『動物の謝肉祭』より 第13曲「白鳥」

フランスで最も偉大な文化人のひとりであったカミーユ・サン=サーンス(1835～1921)は、旅行好きで、北アフリカ、南北アメリカや東南アジアにまで出かけ、天文学・考古学・植物学・民族学などに通じる博覧強記の人でもあった。明快な形式、優美で均整の取れた旋律や和声は、モーツァルトやメンデルスゾーンに近い美学であり、フォーレやラヴェルにも影響を与えている。1886年(51歳)、滞在先のオーストリアで非公開初演された14曲による『動物の謝肉祭』は、他の作曲家の作品からの引用や風刺に満ちていたため、作曲家は生前の演奏・出版を禁じていた。遊びの精神にあふれた全体の流れの中で、生前唯一単独で出版されたこの曲は、水の上を優雅に滑るような気品で、ひとときわ輝く小品である。

ドビュッシー:ピアノ三重奏曲 ト長調

フランスの作曲家クロード・ドビュッシー(1862～1918)は、象徴主義の文学や美術からの影響、東洋、スペイン、ロシアへの関心などを契機に、従来の伝統とは異なる響きを見出し、20世紀音楽への扉を開いた静かなる革命家である。この三重奏曲は1880年(18歳)頃、チャイコフスキーのパトロンとしても知られるナジェジダ・フォン・メック夫人のもとにピアノ教師として雇われていた頃の作品。のちにパリ音楽院で和声と伴奏法の先生だったエミール・デュラン(1830～1903)に献呈されている。第1楽章はみずみずしい抒情と感激にあふれ、第2楽章は口短調のスケルツォと間奏曲で、エキゾティックな舞踊を思わせる。第3楽章はチェロ、ついでヴァイオリンが甘美に夢見心地に歌い、第4楽章フィナーレは憧れと情念を秘め、最後は明るく結ばれる。

偉大なる過去の息吹に触れる、新しい冒険へ

林田直樹

いま、なぜ「フォルテピアノ」なのか？ より性能の優れた、安定性の高い現代のピアノではなく、昔のアンティークなピアノを使う意味は何なのか？ これは現代のクラシック音楽界において、最もエキサイティングなテーマの一つである。

川口成彦さんが第2位を受賞した、2018年にワルシャワで開催された第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクールは、「フォルテピアノ」が、どれほど今後のピアノ演奏シーンにおいて重要であるかを示唆する出来事であった。

川口さんは「フォルテピアノ」の定義について、「第一次世界大戦よりも昔のピアノ」を総称するもの、としてよいのではないかと述べていた。卓見である。第一次世界大戦(1914～18)は、人類初の大量殺戮戦争であったと同時に、それ以前に長く続いていた古き良きヨーロッパの終焉を意味していた。そこには、文化史における巨大な断層があり、音楽の美学の根底的変化を見てとることも可能だからだ。

フォルテピアノは、現代のピアノと比べると、一台一台がすべて異なる手工芸品のような楽器であり、不安定ではあるが、弦楽器に近い、木の響きがする。作曲家が生きていた当時の響きを再現し、かつての時代の美学へと私たち聴き手を連れて行ってくれる。その意味で、川口さんはフォルテピアノを「タイムマシン」とも呼んでいたが、とてもわかりやすい例えである。

と同時に、今回のプログラムでは、サントリーホールが所有する1867年製エラールの音色をさまざまに試そうという意図も感じられる。ショパンからドビュッシーまで、ドイツ、フランス、スペインなどさまざまな国々のピアノ音楽の違いを楽しみ、しかもソロだけではなく、異なる組み合わせによる弦楽器との相性も味わうことができる。最初のショパンと最後のドビュッシーが、“あまり有名ではない初期のものだが、とても優れた作品”という共通項でくくられているのも面白い。

フォルテピアノの世界的第一人者アレクセイ・リュビモフ(1944～)は、2017年11月にサントリーホールのエラールを試弾した際に「これほど完成度の高い大型の、しかも見事な状態で生き生きと保たれた、美しいエラールは世界的にも滅多にない」と絶賛していた。まさに宝物と言えるような名器中の名器なのである。

このエラールは、今回のコンサートをきっかけに、今後のサントリーホールの室内楽演奏において、さらなる可能性を开花させていくに違いない。

(はやしだ なおき・音楽ジャーナリスト、評論家)